三十郎明神の話

今から一五〇年ほど前、四津屋に三十郎という男がいて、ある日大森にある親戚の家へ盆礼に行った。酒に酔った三十郎は帰り道で一本の扇を拾い、何やら楽しくなってその扇を持って踊り、道の片隅で昼寝をしていた明神様に上がってしまった。

ばちが当たったのか、その日から気が変になってしまって、大宮川の橋のたもとにある大きな杉の木のてっぺんにあがってばかりいるようになった。

家の者は心配して近くの神様にどうしたら治るのかと尋ねた。そうしたら

「白旗大明神のばちが当たったのであるから、その神様を自分の家へお受け申せ。」

というお告げがあった。そこで、家の者は白旗大明神を四津屋の家へお受け申してお祀りした。何年か経って、三十郎明神様が上堰を上り下りして

「桜森の明神様から、嫁こ貰ってけれ。」

と叫んだので、家の者は村の衆と宮司に頼んで馬を二頭用意し、二月の雪の日に桜森（田根森）の明神様から嫁を貰ってきたのだと言っている。これは四津屋の佐々木家に伝わる氏神の伝説である。